

1月に実施した生徒316名、教師23名、保護者24名による学校診断アンケートの結果(資料1)をはじめ、全校生徒対象の「こころとからだの健康チェック(10月)」や教育相談アンケート(5, 10月)の結果(資料2, 3, 4)、体育祭と文化祭の参観者アンケートの結果(資料5, 6)を参考に、主に4つの重点努力目標について本年度の取組を振り返り、課題と対応策を示す。

重点努力目標 行事を核とした主体的で活力ある学校生活の推進

※「自分からあいさつをする」と答えた生徒が全校で91.2%であり、昨年度から20%ほど増えている。(=資料1-①)12月に取り組んだ「あいさつ運動」では、生活委員会が工夫し、3週に及ぶ運動が大変盛り上がった。しかし、教師の中には「半分くらいは自分からあいさつできる」「あいさつ運動のときだけ」「校内ではあいさつしても、校外ではまだまだ」といった反省があり、30%弱の教師は全校的には不十分と感じている。

これらのことから、あいさつについて生徒の意識は高まっているが、日常的に自分からあいさつできるまでには至っていないと考えられる。

来年度は、年間を通して計画的に「あいさつ運動」を実施し、生徒が主体となる運動として展開していく。また、あいさつは生徒との良好な人間関係を築く基本と考え、引き続き日常の学校生活の中で、すべての教師が「おはようございます」「こんにちは」と声をかけていく。

※「各種の行事が楽しい」と答えた生徒が全校で94%であり、昨年度から10%以上増えている。(=資料1-②)体育祭や文化祭、学年行事など、生徒の主体的な活動を促すよう委員会や実行委員会を中心に準備運営を行ってきた。「準備の段階から一生懸命努力して盛り上がるのができた」「去年の反省が生かされた内容で充実していた」といった教師の反省の他にも、「子どもたちは、楽しく、一生懸命に取り組んでいた」「盛り上がった、感動した」といった参観者の感想が多かった。特に3年生の体育祭学年演技や競技中の応援、合唱コンクールの姿は、高い評価を得た。(資料5, 6)

※「みんなのためになることを進んで行っている」と答えた生徒は学年が上がるにつれて増え、3年生は90.8%、全校では81.4%であった。(=資料1-⑨)教師の中には「毎回多くの有志や実行委員希望者が集まる」という意見がある一方で、「楽しいことはやるが、そうでないことはしないことがある」「学校のために頑張っている生徒をもっと認めていく必要がある」といった反省もある。

※「自分は学校で認められていると思う」と答えた生徒が75.3%であった。(=資料1-⑩)10月の「こころとからだの元気チェック」では55%程度だった(=資料2-問24)ので、約3か月間で20%ほど増えた。10月以降、文化祭や合唱コンクールの他、委員会や学年行事の実行委員会の活動、2学期終業式後の美化ボランティア活動など、生徒がまわりから認められる機会が多くあった。

これらのことから、生徒が「ありがとう」と言ってもらえる機会が増え、生徒の自己有用感が高まりつつあると考えられる。今後はさらに、当たり前のこと、目立たないことをおろそかにせず、やり続けることの意義を伝えていく必要がある。

来年度も引き続き、生徒の自己有用感を高めるために、学年、学級、生徒会、委員会等、それぞれの担当で、生徒が「ありがとう」と言ってもらえる機会をつくることに努める。また、教師が進んで「ありがとう」と伝え、生徒が物事を自分のこととして、自分の頭で考え、人任せにせず、正しいこと、良いこと、みんなのためになることを自ら進んで実行できるように促していく。

重点努力目標 学ぶ喜びのある授業づくりの推進

※「授業は、学びやすい」と答えた生徒が全校で84.9%であり、昨年度から10%以上増えている。(=資料1-③)一人一人みんなが学び合う授業を目指し、一人一授業公開による校内授業研究を進めてきた。教師の中には、「生徒が落ち着いて前向きに取り組めている」「意欲的に授業に参加することができた」「グループで意見交換しながら課題に取り組むことができた」という反省がある一方で、「活発な意見交換が

できるような手立てが必要」「授業中の生徒の活動が少なかった」「もっと教材研究をし、新しいものをどんどん取り入れてみたい」という反省もある。

これらのことから、授業改善が進みつつあり、全体としては生徒が落ち着いて学習に取り組んでいるが、かかわり合いながら学ぶという点でさらに改善が必要と考えられる。

来年度も引き続き、学びやすい授業を目指し、教師の授業力向上のためにさらに校内授業研究を進め、日常授業の改善に取り組む。また、学校でかかわり合いながら学ぶ意義を再確認し、共感的に聴き合うなど、学習集団としての基本姿勢や学習習慣について具体的内容を示し、生徒への働きかけを行っている。

重点努力目標 深い生徒理解ときめ細かな生徒指導の推進

※「学校に仲のよい友達がいる」と答えた生徒は昨年同様 90%を超え、全校で 98.1%であった。(=資料 1-⑦) また、5月と10月の教育相談アンケートの結果、友達関係(人間関係)で悩んでいる生徒がいずれも 10%未満であった。(=資料 3-1, 4-1)

これらのことから、全体としては生徒の学校内での人間関係は良好だと考えられる。

※「先生たちは、困っていることについて、よく取り組んでくれる」と答えた生徒は学年が上がるにつれて増え、3年生は 90.8%、全校で 84.2%であった。昨年度から 20%以上増えている。(=資料 1-⑥) また、※「自分の気持ちを分かってくれる先生がいる」と答えた生徒も学年が上がるにつれて増え、3年生は 87.1%、全校で 79.1%であった。(=資料 1-⑤) 10月の「こころとからだの元気チェック」ではどの学年も 55%程度だった(=資料 2-問 25)ので、約3か月間で 20%以上増えた。2学期の教育相談や3年生の進路相談が、この時期と重なっており、生徒の困っていることについて深いところまでしっかりとかわるよう努めてきた。しかし、教師の中には「深いところまでしっかりとかわりたいと思っているが、なかなか時間が取れなかったり、生徒も部活動やその他の活動のことが気になって話がしっかりとできなかったりする」という反省がある。保護者の中には「いろいろな性格の子どもたちがいます。子どもたちは皆、自分が認められたいと思っています。一方向からのみ子どもたちを見つめるのではなく、いろいろな方向から子どもたちの可能性を伸ばしていける学校であってほしいと思います。」という意見もあった。

これらのことから、教育相談が充実しつつあり、全体としては生徒と教師の関係はおおむね良好だと考えられる。しかし、問題の大小はあっても、どの生徒も問題を抱えていることを認識し、一人一人の生徒を多面的に見ることができるよう、常に意識しておく必要がある。

来年度も引き続き、すべての教師が、日常的なあいさつや声かけと受動的な態度によって生徒との良好な人間関係を築き、学期1回の教育相談をさらに充実させ、生徒の困っていることについて深いところまでしっかりとかわっていく。また、スクールカウンセラーや近隣大学と連携し、養護教諭と学級担任が協力して心の健康に関する学習を計画的に進めていく。

重点努力目標 積極的な情報発信と地域の教育力の活用

※「文書やホームページの内容は、分かりやすい」と答えた保護者が 95.8%で、昨年度から 30%以上増えている。(=資料 1-⑫) また、※「子どもたちの様子を積極的に伝えようとしている」と答えた保護者は 83.4%であった。(=資料 1-⑪)

これらのことから、学年だよりや学校だより、学校ホームページで、教師がうれしく感じた生徒の行動を具体的に知らせるなど、積極的に情報を発信し、文書や学校ホームページが分かりやすくなってきたと考えられる。

来年度も引き続き、各種文書の表現や表記、レイアウトなどを工夫し、より分かりやすいものにしていく。また、日常の生徒の良いところを見つけ、学年だよりや学校だより、学校ホームページを通して積極的に知らせていくと共に、困っていることや改善していきたいことも知らせていく。

開校2年目となる今年度は、生徒の自己有用感を高めるために、学年、学級、生徒会、委員会等、それぞれの担当で、生徒が「ありがとう」と言ってもらえる機会をつくることに努めてきた。また、昨年度の生徒総会で提案された有志による地域清掃活動、生徒会や委員会による竹の山小学校との合同イベント、近隣大学の学生や留学生との交流を行い、家庭、地域や他校種との交流を進めてきた。

※「学校へ行くのが楽しい」と答えた生徒が前年度86.0%よりも増え88.6%であった。(=資料1-⑧)

年度当初の目標90%にはあと一歩だったが、すべてのアンケート項目について「C：あまりあてはまらない」と「D：あてはまらない」の合計を前年度よりも減らすという目標は達成できた。(=資料1-①②③④⑥⑦⑧⑫)

これらのことから、**今年度の目標はおおむね達成できた**と考えられる。

来年度も引き続き、90%の生徒が「学校に行くのが楽しい」と答えることを目指し、すべてのアンケート項目について、「C：あまりあてはまらない」と「D：あてはまらない」の合計を前年度よりも減らすことを目標にする。

※「・・・・」と答えた生徒（または保護者）とは、アンケートの各質問に「A：よくあてはまる」または「B：どちらかと言えば、あてはまる」と回答した生徒（または保護者）を示す。

第3回学校評議員会（3/27）において、本年度の本校自己評価について報告し、各評議員から意見聴取した。その結果、自己評価について修正等の指摘はなかった。評議員の意見を以下に記す。

「あいさつ」について

- ・朝や夕方の散歩で自分からあいさつするようにしているが、中学生の1割は自分からあいさつしてくれる。6割はこちらがあいさつをすると、顔を見てあいさつを返してくれる。3割は声だけだが、無視はいない。小学生になると自分からの割合が多くなる。（山東）
- ・女の子同士は、朝あいさつしている姿をよく見るが、男の子同士は少ない。（山東）
- ・部活動をやっている子は比較的あいさつできている。（小島）
- ・校外でよく知らない人にあいさつをしないのは、仕方がないこと。大人でもしない。（佐藤）
⇒ 学校では「地域の人にもあいさつを」と言っているが、見ず知らずの人にあいさつするのは難しい。知っている地域の人を増やすことが大切。そういった意味で、中学生を地域のイベントに参加させたい。できればスタッフの一員として。中学生にできることがあれば、ぜひ声をかけてほしい。

「学習について」

- ・授業の様子はどうか。娘の高校の先生から、「やっと今年度、提出物が揃うようになってきた」という話を聞いて、当たり前のことだと思っていたことが、なかなかできないということを知った。提出物が期限通りに出せるということは、ある意味成績よりも大切なこと。指導していつてほしい。（小島）
⇒ 授業中は、どの学年も落ち着いて学習に取り組んでいる。特に2年生は、10月以降良くなった。2年生の授業を担当している教師からもそういった声をよく聞く。提出物については、どの教科も粘り強く指導しているが、1年生は苦勞していた。3学期には、教科担任だけではなく、学年として提出物を確実に出せるように取り組んだ。

「アンケート結果」について

- ・各アンケートの質問にCやDと回答した生徒について、何か理由を書いているのか。（船崎）
- ・全員がAやBと答えるのは逆に問題がある。CやDがある程度いることのほうが健全。（山東、宮田）
⇒ CやDと回答した生徒のことがどうしても気になる。具体的に書いている場合もあるが、書いていないほうが多い。学校診断アンケートは無記名であるが、担任は見当がつくので教育相談などで個別に話を聞いている。各種アンケートは、学校全体の傾向をつかむために集計し、グラフ化するが、担任や学年としては、個々の生徒の状況を把握するものとして活用している。